

小学校における音楽鑑賞教材についての一考察

— 第1学年について考える —

宮坂 明

A Study of Teaching Materials about the Appreciation of Music in Elementary Education — Think about 1st Grade —

Akira Miyasaka

(2011年11月25日受理)

はじめに

現在、我が国の小学校音楽科における領域¹は「表現」及び「鑑賞」の2領域である。各領域には教材選択の観点が表示されているが、具体的な教材として「表現」領域（歌唱についてのみ）では歌唱共通教材が、また「鑑賞」領域では鑑賞共通教材が表示されてきた。共通教材とは、全国一律に指導すべき教材として示された楽曲である。平成10年告示の小学校学習指導要領からは、鑑賞共通教材が表示されなくなった。つまり、教材選択がそれぞれの教員に任されたわけであり、責任は重大である。学習指導要領に教材選択の観点は示されているものの、具体的にどのような楽曲を取り上げればよいのかといった悩みを抱えた教員は多かったのではないだろうか。平成20年告示の小学校学習指導要領に際して発行された『小学校学習指導要領解説 音楽編』においては、付録として「小学校学習指導要領（音楽）で示してきた鑑賞共通教材」が掲載された。このことから、教材選択において混乱が生じていることが推測される。本論文では、小学校学習指導要領に示された教材選択の観点に基づき、特に第1学年の鑑賞教材について考えた。

1. これまでの小学校学習指導要領において示された鑑賞共通教材

鑑賞共通教材がはじめて設定されたのは、学習指導要領が告示されるようになった昭和33年である。ただし、試案であった昭和22年・昭和26年の学習

指導要領においても、次のようなかたちで教材曲が示されていた。本論文は小学校について考えるものであるが、昭和26年については、中学校及び高等学校において、かなりの曲数を分類のうえ示していたことからここで紹介しておきたい。第二次世界大戦を経て真に近代国家へ生まれ変わるにあたって教育は要であり、試案とはいえ学習指導要領において指導内容を細かに記載したことを考えれば、具体的な教材曲を詳しく示したことは当然であったといえよう。

昭和22年：鑑賞レコード教材一覧表

昭和26年：鑑賞用音楽レコード（小）

鑑賞用音楽レコード（中高）

第1類 演奏形態による分類

鑑賞用音楽レコード（中高）

第2類 音楽史による分類

鑑賞用音楽レコード（中高）

第3類 民謡による分類

昭和33年告示の小学校学習指導要領では、教材曲がかなり絞り込まれて整理され、鑑賞共通教材として示された。しかし翌年（昭和34年）には、文部省通達「小学校・中学校音楽鑑賞教材例について」というかたちで、大量の楽曲が例示されている。これは、「共通教材以外は、何を取り上げればよいのか。」といった現場の混乱があったためのものである。²

その後、小学校学習指導要領は昭和43年、昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年と改訂され

別刷請求先：宮坂明，中村学園大学教育学部，〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1

E-mail：miyasaka@nakamura-u.ac.jp

¹ 領域は学習指導要領の方針によって流動的であるが、昭和52年告示要領以後は「表現」「鑑賞」の2領域である。

² 複数の鑑賞指導に関する文献にこういった記載がある。

ているが、鑑賞共通教材は平成元年告示の小学校学習指導要領まで示されている。これまで示された鑑賞共通教材（小学校）は次の通りである。なお、これについて若干補足しておきたい。先行研究にも表としてまとめられたものがあるが、楽曲の順番がバラバラであったり、作曲者名の表記が統一されていない（例えば、ベートーベンとベートーヴェンなど）ため、ここでは平成20年発行の『小学校学習指導要領解説 音楽編』付録「小学校学習指導要領（音楽）」で示してきた鑑賞共通教材における曲順及び表記により、示された年を追加した。（示されていない年は××とした。）

第1学年

「アメリカン・パトロール」 E.W. ミーチャム作曲

××, ××, ××, 元年

「おどる子ねこ」 L. アンダソン作曲

××, ××, 52, 元年

「おもちゃの兵隊」 L. イェッセル作曲

33, 43, 52, 元年

「ガボット」 F.J. ゴッセック作曲

33, 43, 52, ××

「森のかじや」 T. ミヒャエリス作曲

33, 43, ××, ××

第2学年

「おどる人形」 E. ポルディーニ作曲

33, ××, ××, ××

「かじやのボルカ」 Josef シュトラウス作曲

××, ××, ××, 元年

「かっこうワルツ」 J.E. ヨナッソン作曲

33, 43, 52, ××

「出発」（組曲「冬のかがり火」から） S.S. プロコフィエフ作曲

××, ××, ××, 元年

「トルコ行進曲」 L.v. ベートーベン作曲

33, 43, 52, 元年

「メヌエット」（歌劇「アルチーナ」から） G.F. ヘンデル作曲

××, ××, 52, ××

「ユーモレスク」 A. ドボルザーク作曲

××, 43, ××, ××

第3学年

「おもちゃのシンフォニー」 J. ハイドン作曲

33, ××, ××, ××

「金婚式」 G. マリー作曲

33, 43, ××, ××

「金と銀」 F. レハール作曲

33, ××, ××, ××

歌劇「軽騎兵」序曲 F.v. スッペ作曲

××, 43, 52, 元年

「メヌエット」（組曲「アルルの女」より） G. ビゼー作曲

××, 43, ××, ××

「メヌエット」ト長調 L.v. ベートーベン作曲

××, ××, 52, 元年

「ポロネーズ」（管弦楽組曲第2番から） J.S. バッハ作曲

××, ××, 52, 元年

第4学年

「ガボット」 J-P. ラモー作曲

××, ××, 52, ××

「軍隊行進曲」 F. シューベルト作曲

33, 43, ××, ××

「スケーターズワルツ」 E. ワルトトイフェル作曲

33, 43, ××, ××

「ノルウェー舞曲」第2番 イ長調 E.H. グリーグ作曲

××, ××, ××, 元年

「白鳥」 C. サン・サーンス作曲

33, 43, 52, 元年

ホルン協奏曲 第1番 ニ長調 第1楽章

W.A. モーツァルト作曲

××, ××, 52, 元年

第5学年

歌劇「ウィリアム・テル」序曲 G. ロッシーニ作曲

33, 43, 52, ××

「管弦楽のための木挽歌」 小山清茂作曲

××, ××, ××, 元年

組曲「くるみ割り人形」 P.I. チャイコフスキー作曲

33, 43, ××, ××

「荒城の月」, 「箱根八里」, 「花」のうち1曲 滝廉太郎作曲

××, 43, 52, 元年

「タンホイザー行進曲（合唱の部分を含む）」

R. ワーグナー作曲

33, ××, ××, ××

ピアノ五重奏曲「ます」第4楽章 F. シューベルト作曲

××, ××, 52, 元年

第6学年

「赤とんぼ」, 「この道」, 「待ちぼうけ」のうち1曲 山田耕筰作曲

××, ××, 52, 元年

第9交響曲から合唱の部分 L.v. ベートーベン作曲

33, ××, ××, ××

組曲「道化師」 D. カバレフスキー作曲
 ××, ××, ××, 元年
 「春の海」 宮城道雄作曲
 ××, ××, 52, 元年
 組曲「パール・ギュント」 E.H. グルーグ作曲
 33, 43, 52, ××
 「流浪の民」 R. シューマン作曲
 ××, 43, ××, ××年
 「六段」 八橋検校作曲
 33, 43, ××, ××

2. 鑑賞共通教材の是非

特定の楽曲のみを共通教材として示すべきか否かは、賛否が分かれるところである。平成元年まで示されていた鑑賞共通教材曲を分析してみると、偏りが生じていることが明かである。すなわち西洋音楽に偏り、西洋音楽の中でもバロック、古典派、ロマン派の楽曲が多数なのである。特に、ロマン派の楽曲は約半数を占めている。

西洋音楽への偏りについては、明治5年の学制以後、我が国の学校教育においては主に西洋音楽を教えてきたことを考えれば仕方がないことと思われる。戦後の学習指導要領においても、その指導内容は西洋音楽の体系を教えるものである。我が国の音楽などの扱いを増やしてはいるものの、指導の根幹となる部分に変化はない。

西洋音楽の中でも時代に偏りがあることについては、音楽理論の確立、楽器機能の確立などを考えれば、選曲の結果としては当然なのではないだろうか。バロックまでは、教会（キリスト教）を中心とした声による音楽が主流であったわけであり、このような声楽曲が鑑賞共通教材として選曲できたかといえば、宗教上の問題などから難しかったであろうと推測する。なお、あくまでも鑑賞共通教材という視点からこのように述べるのであって、これら声楽曲には優れた楽曲が多数存在する。特にルネサンス後期、イタリアの作曲家で「教会音楽の父」と称されるパレストリーナの作品などは、高度な多声音楽として極めて完成度の高いものである。

昭和33年～平成元年の小学校学習指導要領において示された鑑賞共通教材は、偏りはあったものの一定の意味を持っていたことは確かであろう。なぜならば、何を教えてよいかわからない状態に一石を

投じてきたからである。しかし、指導にあたって音楽科の目標を見失い、いかに教材を教えるかに終始したため、平成10年告示の小学校学習指導要領からは、鑑賞共通教材は示されないことになった。

小学校教員の大多数は、音楽科³の免許状を持っていない。鑑賞共通教材が存在しない現在、やはり教材選択に苦慮しているのではないだろうか。平成20年発行の『小学校学習指導要領解説 音楽編』付録〔小学校学習指導要領（音楽）〕で示してきた鑑賞共通教材の掲載は、まさにこれを意味していると思われる。共通教材として示さないにしても、教材選択の観点に照らし、適する教材を多数示すことが必要なのではないかと考える。

3. 小学校第1学年に適していると思われる楽曲

小学校学習指導要領音楽科第1学年⁴における鑑賞教材選択の観点の変遷は、次の通りである。

昭和33年告示

第1学年

なるべく違う種類、違う演奏形態の音楽を、次の3曲を含め、年間8曲以上聞く。

（楽曲については省略）

※教材選択の観点と思われる記載もあるが、明確でないためここでは省略する。

昭和43年告示

第1学年

次の各項に該当する曲目を、エに示す共通教材3曲を含めて年間8曲以上聞かせる。

ア 明るく軽快な感じのもの

イ 静かで旋律の美しいもの

ウ なるべく種類や演奏形態の違うもの

エ 共通教材

（楽曲については省略）

昭和52年告示

第1学年

教材は、ウの共通教材3曲を含めて、次に示すものを年間6曲程度取り扱う。

ア 舞曲を含めたいろいろな種類の声楽曲や器楽曲

イ いろいろな演奏形態による声楽曲や器楽曲

ウ 共通教材

（楽曲については省略）

³ 教員養成校において音楽を専攻した者は、中学校・高等学校における音楽専科の免許状を取得しているが、小学校教員で音楽専科の免許状を取得している者は少数である。

⁴ 平成10年以後は、2学年ごとの記載に変更されている。

平成元年告示

第1学年

教材は次に示すものを取り扱う。

ア 主となる鑑賞教材は、イの共通教材3曲を含めて、次に示すものを年間6曲程度。

(ア) 行進曲及び舞曲を含めたいろいろな種類の楽曲

(イ) いろいろな演奏形態による楽曲

(ウ) 日常の活動や経験に関連して親しみやすく、身体反応の快さを感じ取ることができる楽曲

イ 共通教材

(楽曲については省略)

平成10年告示

第1学年及び第2学年

鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。

ア 日常の生活に関連して、情景を思い浮かべやすい楽曲

イ 行進曲、踊りの音楽、身体反応の快さを感じ取りやすい音楽など、いろいろな種類の楽曲

ウ 児童にとって親しみやすい、いろいろな演奏形態による楽曲

平成20年告示

第1学年及び第2学年

鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。

ア 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常の生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲

イ 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、親しみやすい楽曲

ウ 楽器の音色や人の声の特徴を感じ取りやすく親しみやすい、いろいろな演奏形態による楽曲

基本ラインは、大きく変化していないと言ってよいのではないだろうか。平成20年告示の学習指導要領において「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた」といった記載を加えているが、これは西洋音楽偏重を是正するためのものと思われる。けれども、前述の通り、我が国の学校教育が西洋音楽を教える体系であることに変わりはない。また、以前から低学年については「表現科」とする構想があり、鑑賞というよりも音楽を聴いて身体を動かすといった学習活動をより意識したともとれる。

では平成20年告示の小学校学習指導要領に記載

された鑑賞教材選択の観点を踏まえ、具体的にどのような楽曲を選択すべきなのだろうか。第1学年においてまず選択すべきは、行進曲及び舞曲と考える。アの後半に記載された「日常の生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲」やイの記載は、考えて聴くことが必要であり、1年生から要求すべきとは思えない。ウの記載については、様々な行進曲・舞曲を選ぶことで可能である。ウの記載中に「人の声」があるが、これについては「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた」で考えるべきであろう。音楽科における鑑賞は、単に聴く（listen）ではなく、理解して聴く（appreciation）をめざしている。理解するためには学習が必要であり、その大前提は興味であろう。第1学年においては、身体を動かしながら楽曲を聴くなどにより、まずは楽しく聴く習慣をつけることが大切なのではないだろうか。

本学人間発達学部人間発達学科児童発達学専攻3年次科目に「音楽科教材研究」があるが、この科目では例年、初回授業時に学習指導要領に記載された教材選択の観点から思い浮かぶ楽曲を問うている。卒業後は小学校で教壇に立つであろう学生たちが、どのような楽曲を答えたのかここで少し触れてみたい。例年あまり変化がないので、平成23年度の履修者9名について紹介する。本論文は、第1学年について考えるものであることから、ここでは第1学年及び第2学年⁴についての回答のみ紹介する。なお、この科目の履修者は、「音楽科教育法」において鑑賞領域の要点については学んでいるが、実践的な学習として鑑賞領域を中心とした模擬授業は行っていない。

第1学年及び第2学年の教材選択の観点から思い浮かぶ楽曲

A：ラデツキ行進曲

B：トルコ行進曲⁵

C：トルコ行進曲⁵、天国と地獄

D：トルコ行進曲⁵、白鳥の踊り、こんぺいとうの踊り、さくら(?)⁶、サウンド・オブ・ミュージック

E：カノン(?)⁶

F：ロンド橋、トルコ行進曲⁵

G：トルコ行進曲⁵、カノン(?)⁶

H：トルコ行進曲⁵、くるみ割り人形、魔王、サウンド・オブ・ミュージック

⁵ ベートーベンとモーツァルトの楽曲が有名であるが、具体的にどちらの楽曲をさすのか不明。別の楽曲であることも考えられる。

⁶ 具体的にどの楽曲をさすのか不明。

I：思い浮かばない

「音楽科教育法」における鑑賞指導の要点で触れた【過去の学習指導要領において鑑賞共通教材として示されていた楽曲】や自分が知っているいくつかの楽曲を何とか記入した状態である。この科目は選択科目であることから、音楽に興味があり、さらに専門性を高めたい学生たちが履修しているにもかかわらずこのような状況である。これを踏まえ、当該科目では教材に適する楽曲の鑑賞や教材研究を行っているが、時間も限られており多くの楽曲を扱えるわけではない。つまり、教員として採用された後の教材研究にかかっているのである。

ここでは、視聴などを通して得られた、第1学年に適すると思われる若干の楽曲（主に行進曲・舞曲）を紹介するが、これで十分というわけでもないし、各教員の考え方によって選曲は無限であることは断っておきたい。選曲にあたっては、次のような点に留意した。二点目の「芸術的に優れた楽曲。」は曖昧であるが、音楽教育学関連の複数文献において掲げられている事項である。芸術の意味として、『大辞泉』に「特定の材料・様式などによって美を追求・表現しようとする人間の活動。および、その所産。…（後略）…」とある。また、フランスの作曲家、指揮者、教育者であるヴァンサン・ダンディは、講義録『Cours de Composition musicale』のなかで「アートとは、生の手段である。魂の生のためには、自由で制約なきアートのかたちがある。」と述べている。信念ともいえる音による主張が多くの人を魅了し、長期にわたり演奏され、聴かれる存在となったとき「芸術的に優れた楽曲」となるのではないだろうか。こういった楽曲は、娯楽に類する楽曲とは根本的に異なるといえよう。第1学年の教材であっても、選曲にあたっての方向性として重要と考える。

- ・学習指導要領に記載の教材選択の観点に値する楽曲。
- ・芸術的に優れた楽曲。
- ・幼稚園との関連がある楽曲。
- ・我が国の学校教育が西洋音楽を教える体系であることから、西洋音楽の様式により作曲された楽曲。

（上記以外の留意点として）

- ・CD・DVD等のソフト入手が容易である楽曲。

【過去の学習指導要領において鑑賞共通教材として

示されていた楽曲】

鑑賞共通教材が示されなくなったとはいえ、教材曲としての魅力を失っていない。先行研究も豊富であるし、現在においても教科書への掲載が見られる。またCD・DVD等のソフト入手も容易である。

【行進曲】（鑑賞共通教材として示されていた楽曲は除く）

スーザの行進曲：「ワシントン・ポスト」「雷神」「星条旗よ永遠なれ」「士官候補生」など是有名である。

エルガーの行進曲：「威風堂々」など是有名である。

「結婚行進曲」（メンデルスゾーン）

「トルコ行進曲」（モーツァルト）

「ラデツキー行進曲」（ヨハン・シュトラウス1世）

など

スーザの行進曲は、幼稚園や保育園の運動会でもお馴染みの楽曲である。「聴いたことがある」は、学習への動機づけとして重要と言えよう。「星条旗よ永遠なれ」は「世界三大行進曲」の1曲である。残り2曲は「軍艦行進曲（軍艦マーチ）」（瀬戸口藤吉）「旧友」（タイケ）であるが、戦争を強く感じさせる響きと捉えあえて選曲しなかった。

歌劇の中にも行進場面が数多く存在する。ワーグナーの「タンホイザー」入場行進曲や「ローエングリン」婚礼の合唱（結婚行進曲）、ヴェルディの「アイーダ」凱行行進曲などは名曲であり、どこかで聴いたことがあるメロディーと思われる。ただし、第1学年の教材とするには工夫が必要と思われる。

【舞曲】（鑑賞共通教材として示されていた楽曲は除く）

ヨハン・シュトラウス1世による舞曲

ヨハン・シュトラウス2世による舞曲：「美しく青きドナウ」は有名である。

バレエ曲：チャイコフスキー「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」

など

ヨハン・シュトラウス父子は、多くの舞曲を残している。特にヨハン・シュトラウス2世は「ワルツ王」と称され、そのワルツには名曲が多い。前述の行進曲では「ラデツキー行進曲」（ヨハン・シュトラウス1世）を選曲したが、この父子は行進曲も多数作曲している。

バレエ曲は多数存在するが、選曲のチャイコフス

キーによるものは「世界三大バレエ曲」として知られ、鑑賞共通教材として示されていた楽曲も含まれる。なお、バレエ曲は一般的には舞曲に含まないが、その一部分を捉えたならば学習指導要領の記載「踊りの音楽」に該当する。

ワルツは多くの人が知っている舞曲であるが、ヨハン・シュトラウス父子以外の楽曲としては、ショパン（「子犬のワルツ」など）やブラームス（「ワルツ集」第15番は有名）のピアノ曲などによく聴かれる楽曲が存在する。

【行進曲・舞曲以外の楽曲】

教員免許状更新講習における教材研究の際、現職教員から「おどる子ねこ」は1年生の教材としてとても適しているとの声を耳にした。教材選択の観点である「情景を思い浮かべやすい」は、第1学年の教材選択にあたって大いに留意すべき点であろう。アンダソン（「おどる子ねこ」の作曲者）の作品には、この観点を満たすものが多い。よく知られた作品としては「トランペット吹きの休日」などがある。難点としては、記載した2曲以外はCD等が入手しづらいということである。

「情景を思い浮かべやすい」楽曲は、前述のチャイコフスキーの3曲もそうであるが、バレエ曲や歌劇などに多数存在する。また、ピアノの小品などにも多数存在する。

おわりに

第1学年の鑑賞教材として適する楽曲をいくつか例示したが、限りなく存在する楽曲の中から数曲を抽出するのは難しいことである。最終的には各教員の選曲によるであろうが、教員養成に携わる者として、本研究のような発信をすることは必要と考えている。音楽科の目標である「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」を達成するのに相応しい楽曲を選択し、学習活動を展開して欲しいと願っている。

小学校第2学年以後の学年については、順次研究を進めたいと考えている。また本論文では、我が国の学校教育が西洋音楽を教える体系であると捉え、我が国や諸外国の音楽を除外しているが、これらの音楽の鑑賞についても研究を進めたい。

参考文献

- 宮坂明「「表現科音楽」一考察」、日本音楽教育学会学会誌「音楽教育学」第26-2号、1997
- 津田正之／儀間綾子「鑑賞共通教材廃止の背景とその意味―音楽鑑賞指導の今後のあり方をめぐって―」、琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要、2001
- 西島千尋「クラシック音楽は、なぜ〈鑑賞〉されるのか」、新曜社、2010
- 鈴木渉／伊藤綾「歌唱共通教材の履修度と周知の状況を調査する―歌い継がれる曲の価値に関する考察―」、山形大学紀要（教育科学）第15巻 第2号、2011